

『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』第52号 拠刷（2025年12月）

BULLETIN OF THE KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM  
Cultural Sciences No. 52

【調査報告／Report】

**三浦市間口洞穴遺跡 第7次発掘調査概報  
(前庭部の確認調査)**

**Report of Archaeological Excavation on  
Makuchi Cave**

間口洞穴遺跡学術調査団

(佐藤兼理・釤持輝久・杉山浩平・高橋健・萩野はな・宇根宏紀)

Makuchi Cave Archaeological Research Project Team;  
SATO Kenri, KENMOTSU Teruhisa, SUGIYAMA Cohe,  
TAKAHASHI Ken, HAGINO Hana, and UNE Hiroki

## 【調査報告】

三浦市間口洞穴<sup>(1)</sup>遺跡 第7次発掘調査概報（前庭部の確認調査）

## 間口洞穴遺跡学術調査団

佐藤兼理・釤持輝久・杉山浩平・高橋健・萩野はな・宇根宏紀

## 【キーワード】

弥生時代 海蝕洞穴 前庭部 発掘調査

## 【要旨】

本報告は、弥生時代の海蝕洞穴の利用実態の解明の準備調査として実施した、神奈川県三浦市間口洞穴前庭部における発掘調査の概報である。洞穴の入口より1m手前に3m×1.5mの調査区を設定し、地表から約2.6mまで掘削を行った。調査の結果、鎌倉時代末～南北朝期初頭に属する合わせ口かわらけ一対と、同時期の土地造成痕跡を検出した。しかし、弥生時代の土層までは到達できなかった。前庭部の土層堆積が予想以上に厚く、弥生時代の層に達するためには、より深い掘削が必要であることが判明した。また、調査目的とは異なるものの、中世の土地開発に関する遺構・遺物が出土した点は洞穴の利用史を考察する上で重要な発見といえる。

## 1 調査の目的

## (1) 本研究の目的

神奈川県は全国でも有数の海蝕洞穴の密集地域であり、その多くは三浦半島に集中している。これらは縄文時代末から近世まで様々な目的で利用してきた。中でも弥生時代は特に利用が盛んな時期である。洞穴内からは、卜骨や人骨、炭灰層など祭祀や葬送、生産活動に関連する痕跡が検出され、その利用目的をめぐってはこれまで様々な研究が行われてきた（赤星1953、釤持1972、中村2017、西川2018、杉山ほか2019 ほか）。しかし、これらの洞穴の具体的な役割やその社会的背景については現在も議論の決着をみない。

その理由の1つに、従来の調査・研究が洞穴内部にのみ焦点を当て、前庭部（出入口外側）に目を向けることが少なかったことが挙げられる。洞穴を利用する民族事例などをみると、内部だけでなく、明るくスペースがとれる前庭部も作業場として活用することが一般的である。近年の事例では、山形県日向洞穴遺跡では前庭部から縄文時代草創期の炉を伴う竪穴状遺構が検出されている（長井2020）。

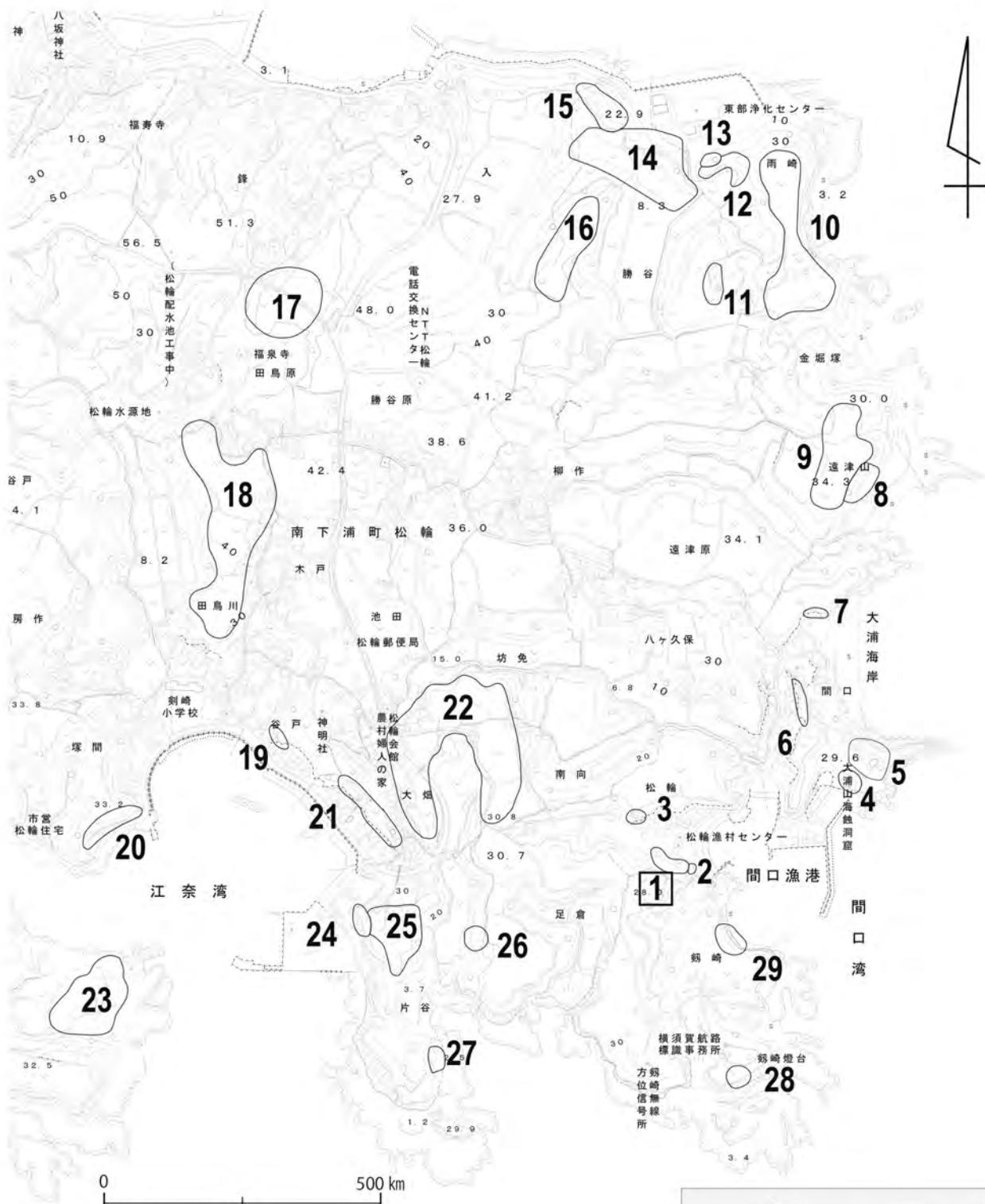
前庭部での活動を視野に入れてこなかった従来の研究では、洞穴利用の全体像を解明することが困難である。洞穴利用の人類誌の構築のためには、前庭部の発掘調査を行い、内部とどのように関連していたのか明らかにすることが急務である。

前庭部というこれまで十分に調査されてこなかった領域の実態が解明されれば、祭祀場や製塩場などと考えられてきた海蝕洞穴の役割に新たな解釈をもたらすことになる。さらには、食糧生産や定住化が進んだ農耕社会において、遮蔽空間をもつ特殊な自然地形としての洞穴が果たした役割の一端を解明することにも繋がるであろう。

本研究の目的は海蝕洞穴である三浦市間口洞穴遺跡の前庭部を発掘調査し、その利用実態を明らかにすることである。海蝕洞穴の前庭部は、波の浸食などにより前庭部が消失・破壊されているものが多い。しかし、間口洞穴遺跡は現在でも調査可能な前庭部が明確に残る数少ない遺跡であるため、研究対象として設定した。2024年度の調査は、本格的な調査の準備段階として、前庭部の堆積状況および遺構確認面までの深さを確認するための試掘調査を行った。本報告は、この調査の概報という位置づけである。執筆は佐藤が担当した。2024年度調査の概要と調査体制については以下の通りである。

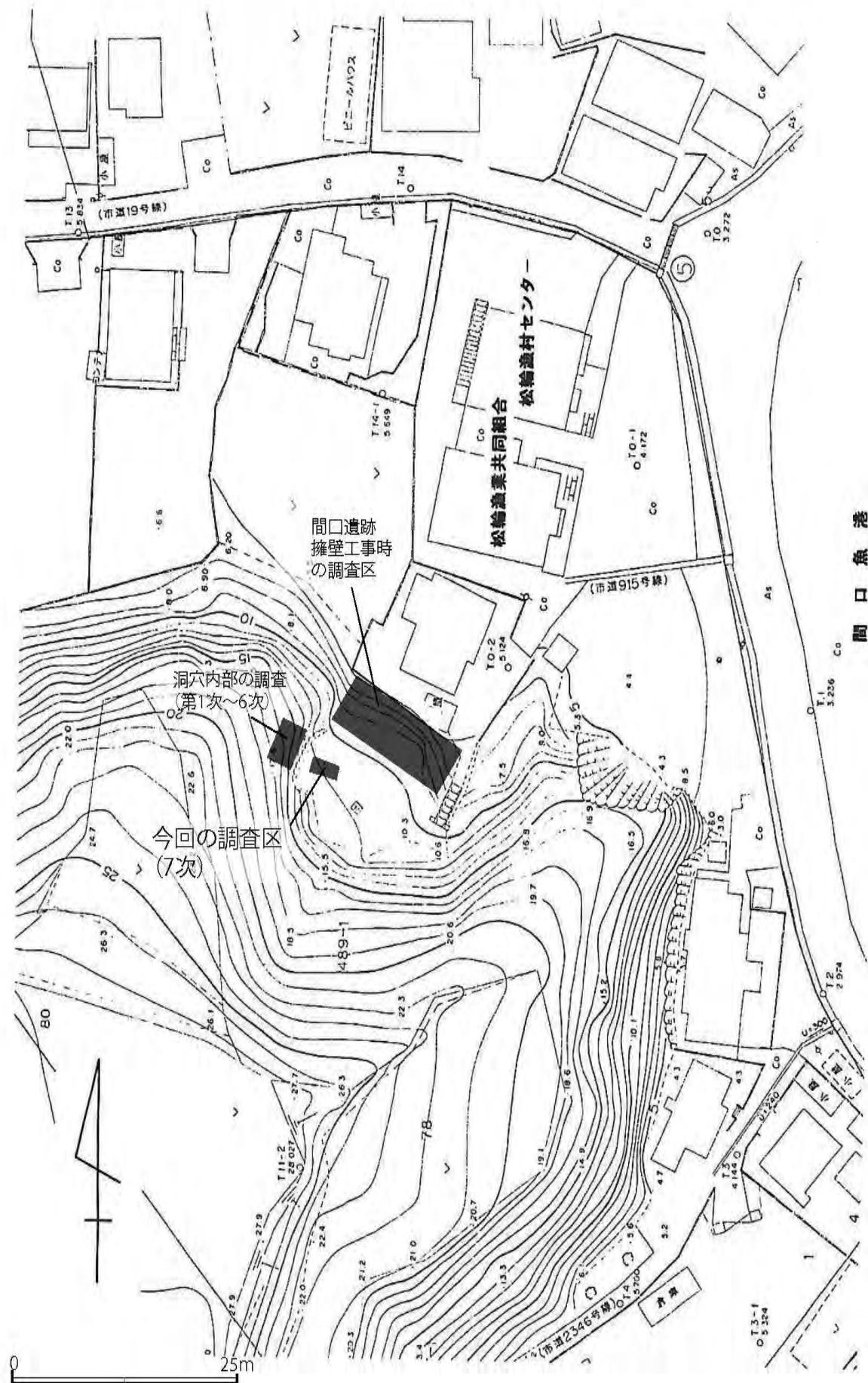
第1表 2024年度調査概要

調査地点	神奈川県三浦市南下浦町松輪字松輪489番1
調査面積	4.5m <sup>2</sup>
調査期間	2025年2月20日～2月24日



第1図 開口洞穴遺跡の位置と周辺の遺跡





第2図 本調査と過去の調査の位置

第2表 調査体制（所属は、2025年3月現在）

調査体制	氏名	所属
担当者	釣持 輝久	赤星直忠博士文化財資料館館長、横須賀考古学会会長
調査補助員	佐藤 兼理	神奈川県立歴史博物館
発掘作業員	杉山 浩平	東京大学総合文化研究科 グローバル地域研究機構
発掘作業員	高橋 健	横浜ユーラシア文化館
発掘作業員	萩野 はな	横須賀市自然・人文博物館
発掘作業員	宇根 宏紀	慶應義塾大学修士課程

## （2）調査地点と周辺の歴史

間口洞窟遺跡は、三浦市南下浦町松輪字松輪に所在する、弥生時代中期から近世にかけての遺跡である（図1）。遺跡は三浦半島の南東端に位置し、剣崎灯台が建設されている海岸段丘中腹に位置し、テラス状の平坦面に向かって東側に開口する。周囲を丘陵に囲まれた小湾に面しており、東に50mほどで漁港となる。内湾の対岸には東京湾を挟んで房総半島を臨む。現在の前庭部の平坦面は戦時に壊された神明社の建設の際に整地されてできたものであり、遺跡が利用されていた当時とは若干状況が異なる。

洞穴の入口の幅は約4m、高さは約6m、奥行き約18mで、洞穴内の弥生時代の生活面の最も低い標高は約5.5mである（図2、3）。三浦半島の地質は硬質の凝灰岩（初声層）と粘土質の泥岩（三崎層）の互層となる。三浦層群と呼ばれるこの地層が褶曲や断層によって斜方向や山形に歪み、そこに波の浸食作用が働くことで海蝕洞窟が形成される。三浦半島の海蝕洞窟の横断面が三角形や平行四辺形を呈するのはその地質的な特性に起因する。間口洞穴も出入口部分の横断面が三角形を呈しているのはこのためである。ただし、内部の天井は戦時に防空壕として利用された際に一部が平坦に掘削されているため、本来はより鋭角な天井面であったと考えられる（赤星1953）。

前庭部は約95m<sup>2</sup>の広さを有している。その中央に小さな祠があり、周辺約3.3m×5.1mの範囲を囲うように縁石が敷かれている。先述した神明社が建築されていた範囲と推定できる。この範囲の外の約20m<sup>2</sup>が調査可能なエリアとなる。

間口洞穴遺跡が所在する南下浦町松輪という地名は建武2年（1335）9月27日の「足利尊氏充行下文」に「三浦内松和」とあり、これが初出とみられる。この他に、「小田原衆所領役帳」にも「三浦松輪」とあることから、鎌倉時代末～南北朝時代には既に「松輪」という

地名が定着していたものと考えられる。また、延宝2年（1678）江戸新肴場が設立されて以来の付浦であり、網漁・菱突・鮪漁・蛸壺漁などが行われていたと記録にある（鈴木ほか1993）。当地は近世以前から漁業が盛んな地域として知られていたのである。

しかしながら、「間口」という地名に関しては、中近世の文献に明確な記述を確認することは、管見の限りできなかった。間口洞穴遺跡を最初に調査した赤星直忠の記録によれば、間口湾一帯は地元において「また」と称され、間口洞穴も「また洞」と呼ばれていたという（赤星1953）。現時点では、これらの俗称に由来して「間口」という地名が成立した可能性が高いと考えられるが、確証を得るには至っていない。この点については、今後の調査・研究を要する課題である。しかし、本報告の主題からは逸脱するため、ここではこれ以上の検討は行わない。

## （3）間口洞穴遺跡のこれまでの調査経過

間口洞穴遺跡は、前庭部の崖面の擁壁工事も含めると過去7回にわたり発掘調査が実施されており、そのほとんどが学術目的の調査である（図2）。（1次：赤星1953、2～6次：神澤勇一（編）1971～1975、間口遺跡の前庭部擁壁工事：急傾斜地区埋蔵文化財調査団1994）。

1次調査は、1949年12月～1950年1月にかけて、先述した赤星直忠が率いる横須賀考古学会によって実施された。調査では弥生時代後期～古墳時代および中世の遺物が検出された。とりわけ、この調査で全国で初めてト骨が出土したことは、間口洞穴遺跡の名が広く知られる契機となった。ただし、当該調査における具体的な調査地点の記録は現存しておらず、後の調査により間接的にその位置が推定されている。

2～6次調査は1971年3月から1973年8月にかけて、当館の前身である神奈川県立博物館によって実施された。1967年の開館当初は、開発に伴う発掘調査がまだ

一般化しておらず、展示資料の収集および地域研究の推進を目的として、県内各地で独自の調査が行われていた。本遺跡の調査もそうした活動の一環として位置づけられる。

調査範囲は洞穴内部の中央部にあたり、地表面から約2mの掘削が行われた。弥生時代中期後葉から古墳時代にかけての遺物が出土し、特に弥生時代の骨角器や貝製品が多数検出された。また、アオウミガメの腹部の骨を用いた古墳時代の卜甲が全国で初めて発見されたことで、卜骨の出土と並び、本遺跡の学術的重要性を改めて示す成果となった。また、遺構としては、1m以上堆積した弥生時代の炭灰層や古墳時代の石圓墓が検出されており、これもまた注目すべき成果である。これら一連の調査は、三浦半島における海蝕洞穴遺跡の本格的な学術調査としては初の試みであり、以後の同地域における洞穴遺跡研究の基盤を築く重要な契機となった。

擁壁工事は前庭部の崖面が急傾斜地区崩壊危険区域に指定されたことを受け、擁壁設置が必要となったために実施された緊急調査である。調査は横須賀考古学会の会員を中心に編成された調査団によって行われ、擁壁で覆われる崖面を対象に実施された。出土品は中世のかわらけが60点のほか、鉄製品やウマ・ウシなどの動物骨、人骨などが出土している。斜面部での調査ではあるものの、前庭部の土層堆積状況が確認できる唯一の調査例である。この調査によると、前庭部では鎌倉時代末～南北朝期初頭の遺物が出土しており、前庭部を含めた洞穴全体が、中世においても活用されていたことが明らかとなった。

これまでの調査から、間口洞穴遺跡は弥生時代中期後葉から近世にかけての人々の活動の痕跡が見られており、特に弥生時代中期後葉から古墳時代後期にかけての利用が盛んであったことが判明した。

## 2 調査の概要

### （1）トレンチおよび遺構

今回の調査では、前庭部の3m×1.5mのトレンチを設定し、掘削を行った（図4）。その結果、土坑が2基と土地造成の痕跡が検出された。出土したかわらけの年代から、鎌倉時代末～南北朝期初頭のものと考えられる。また、土壇や土坑が造成された時期については、かわらけの時期と同時代あるいはそれ以降の時期に位置づけられると推定できる。

土層の概要は以下のとおりである（図4～6）。第1層および第3層は自然堆積層に分類される。第1層は現代の表土に相当し、第3層は第1層よりやや暗色で粘性を有している。現時点では、大正時代に存在していた前庭部の社殿整地に伴う土層と考えられる。第2層は角

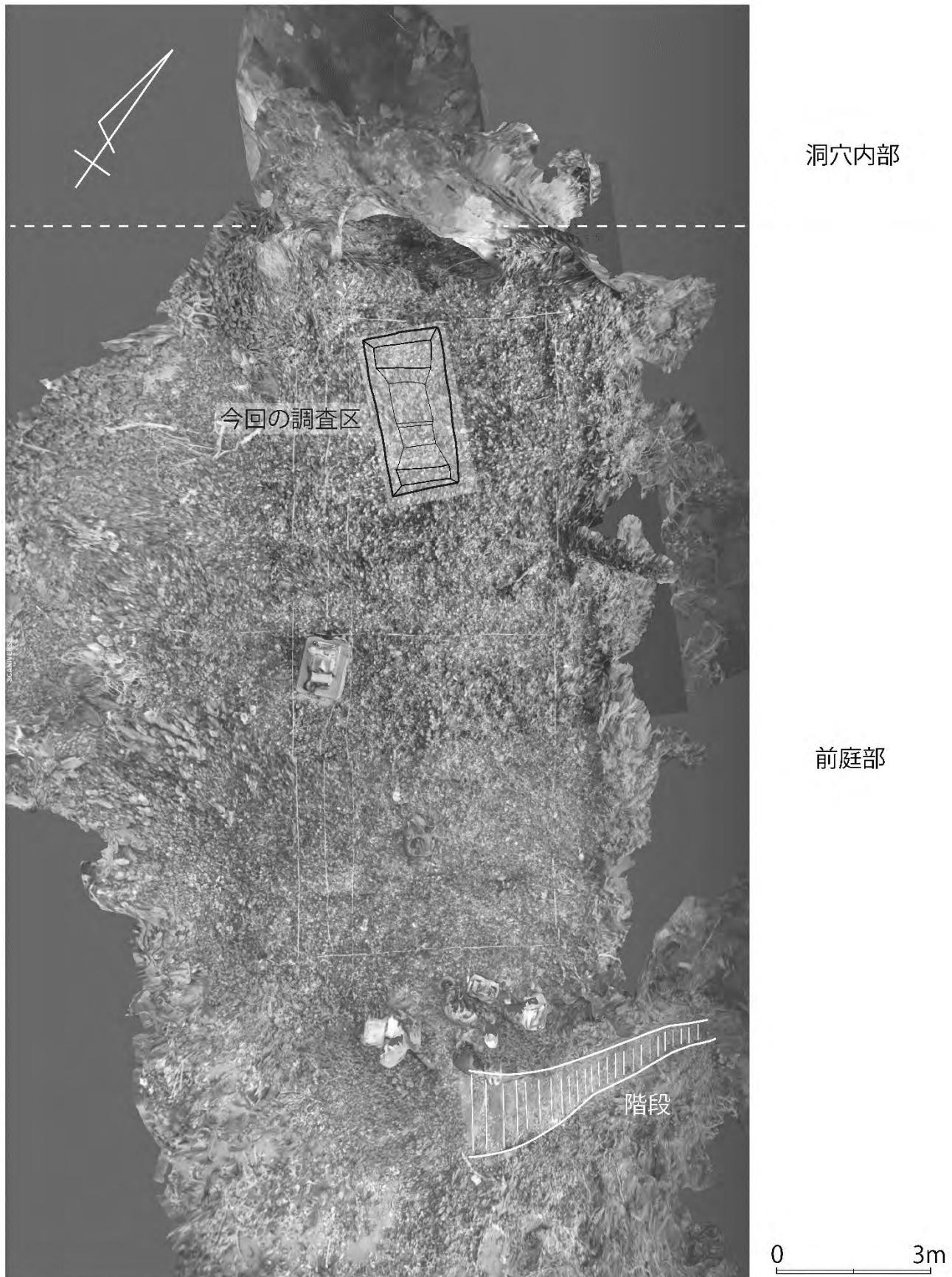
礫や貝類が混在する土層であり、1970年代に神奈川県立博物館が実施した発掘調査において掘削されたトレンチに、洞穴内部の土を埋め戻して形成されたものと推定される。第4層はやや明るく鈍い橙色を呈し、粘土質で締まりがあり粘性が強い。小石などの混入は認められず、遺物も出土していない。第5層は褐灰色を呈し、粘土質で締まりが強い。第6層との境界部に沿って、約7cm程度のロームブロックがまとまって検出されている。また、南側セクションでは柱穴跡のような形状で第6層に食い込む様子が確認されており、この層が生活面であった可能性が示唆される。第6層は淡黄色を呈し、非常に堅緻な土質で、一部には三浦層群に類似する白色の砂岩が混在する。スコップでの掘削が困難なほど硬く、調査時にはツルハシを用いて掘削を行った。堆積の厚さは最大で約60cmに達し、自然堆積とは考えにくい硬さ、洞穴内部には見られない独特的の土質、厚い堆積状況などから、人工的に造成された土層であると判断される。版築に類似した方法により土壇が築かれたものと推定される。第7層は明褐色で、土質は締まりに乏しく、やや脆い印象を与える。第6層との境界に沿って小石やや大きめの礫が検出されており、西側セクションでは柱穴状の痕跡が確認されている。この層も整地された生活面であった可能性が高い。第8層は第6層とほぼ同様の性質もち、淡黄色で非常に堅緻な土質を示す。この層からは2個で1組の合わせ口のかわらけが出土しており、第8層の形成時期は鎌倉時代末～南北朝期初頭にあたると考えられる。

### （2）遺物

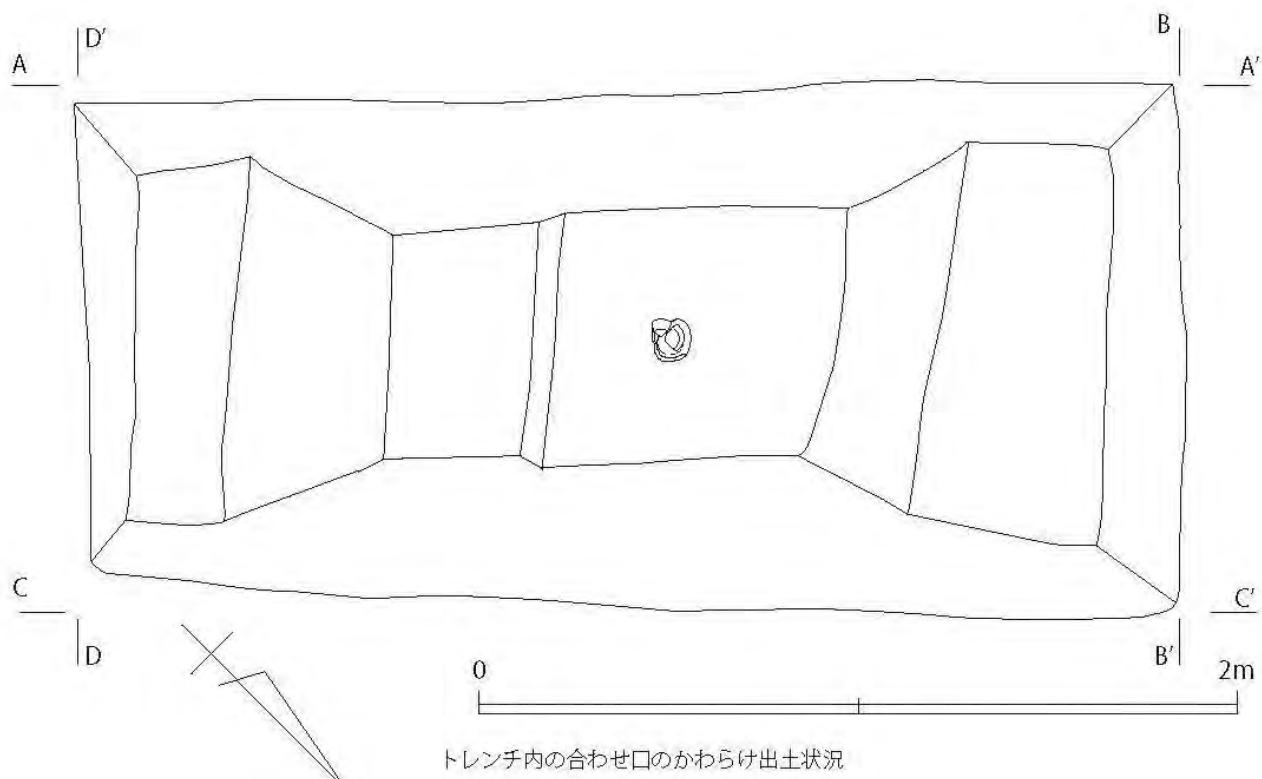
全体的に遺物の出土が少なく、1層及び2層から近世の茶碗片や蛸壺片、古銭1点（寛永通宝）が検出されている。しかし、これらはいずれも県立博物館調査時に埋め戻された土壤から出土したものであり、層位的な情報価値は乏しい。

明確な出土遺物としては、第8層から出土した合わせ口のかわらけが挙げられる（図4）。出土時に一部破損が認められたものの、ほぼ完形に近い状態で検出された。直径約13cmのかわらけ2点の口縁部を合わせ、地表面に対して水平に配置された状態で発見されている。内部には有機物を含む黒色の土が充填されていたため、周辺土壤とともに取り上げ、整理作業中に室内発掘を実施した。その結果、炭化した米粒5点を検出した（図4）。また、かわらけの表面には粘土状の物質が付着しており、詳細な分析が必要なため、現在、接合および実測は保留している。

合わせ口のかわらけは、鎌倉時代において神道および陰陽道の地鎮・祈祷儀礼に使用されたものと考えられており、内部に銭貨や五穀を納める事例が多く知ら



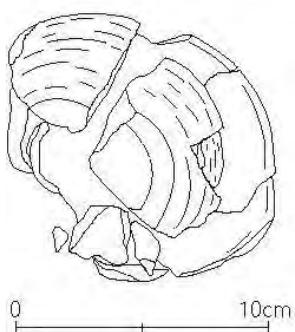
第3図 間口洞穴前庭部と調査区



合わせ口のかわらけ出土状況 1



合わせ口のかわらけ出土状況 2

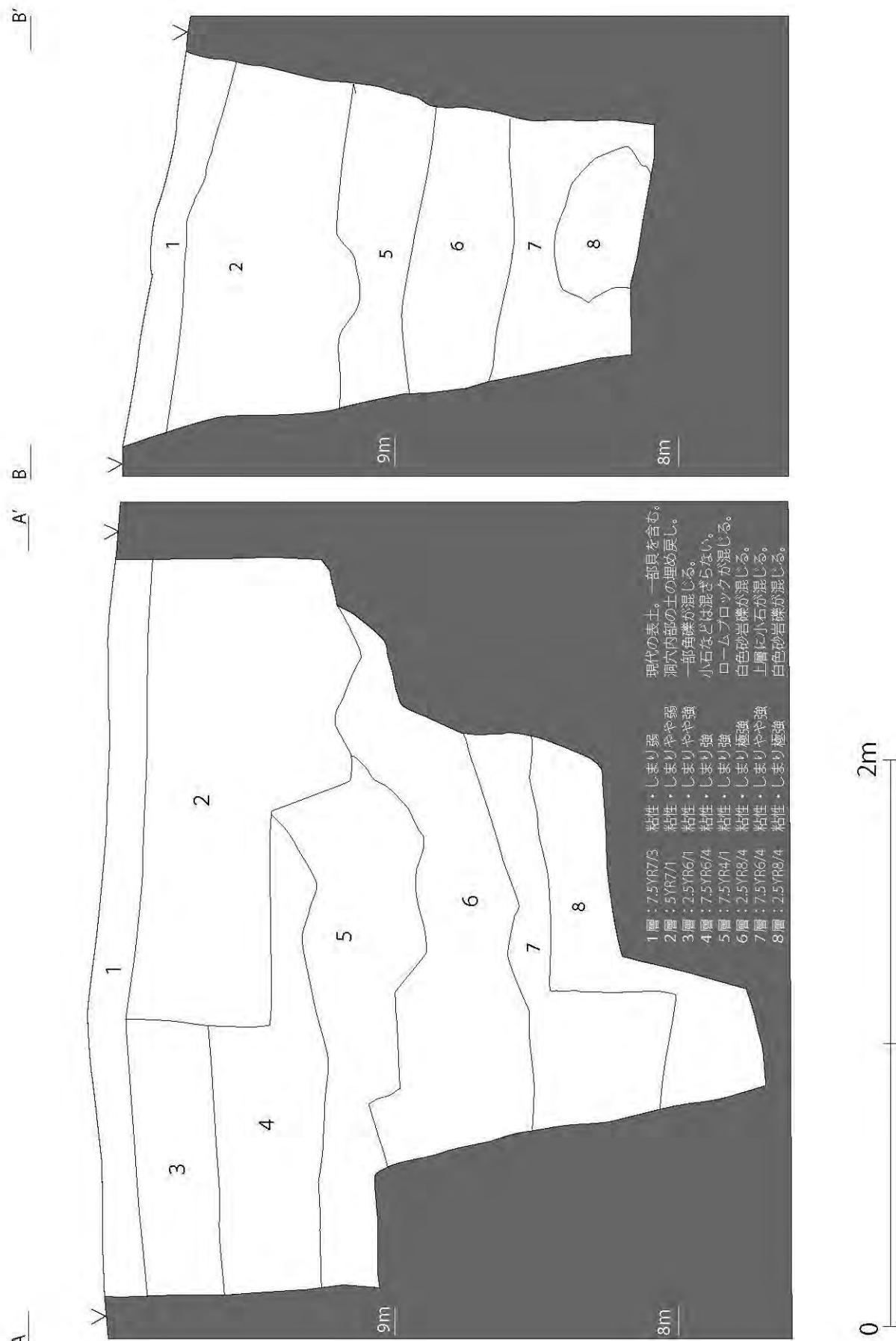


合わせ口のかわらけ出土微細図

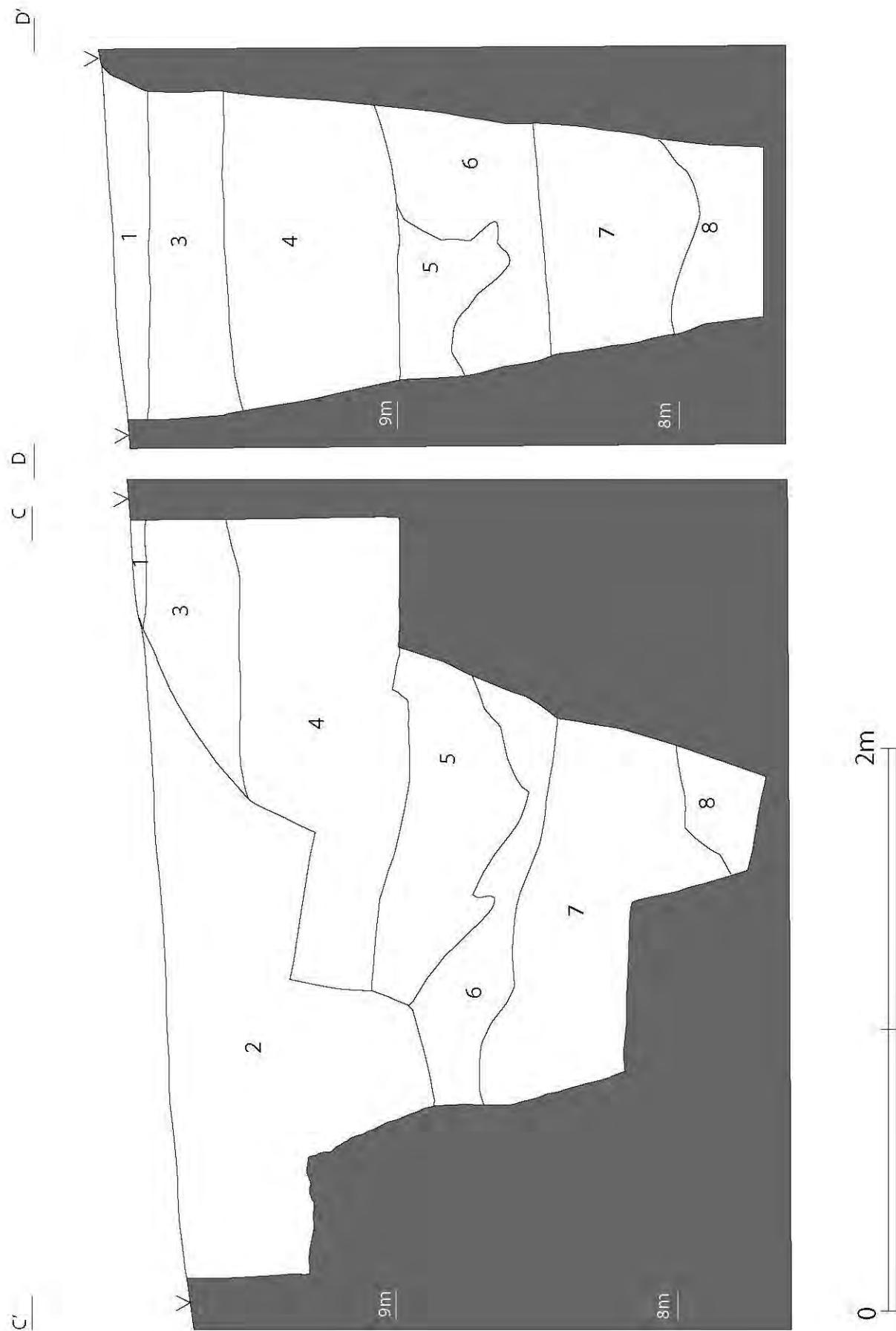


検出された黒化した米粒

第4図 トレンチおよび合わせ口のかわらけ出土状況



第5図 トレンチ東・北側セクション図



第6図 トレンチ西・南側セクション図

れている。鎌倉市内では大糸迦堂遺跡などをはじめ、同様の出土例が複数報告されている（鎌倉市教育委員会2009）。本調査で検出されたかわらけが、洞穴入口の正面に埋設されていたことから、洞穴前庭部の造成に先立ち、土地を清め鎮める目的で埋納された供物であった可能性が高いと考えられる。

### 3 2024年度の調査まとめ

今回の第7次調査では、地表面から約2.6mの深さまで掘削を行ったが、当初の目標であった弥生時代の地層には到達することができなかった。しかしながら、前庭部の土層堆積が予想以上に厚いことが確認され、調査範囲を拡大し、より深部への掘削が必要であることが明らかとなった。今後は、洞穴入口部と前庭部の接続部を中心に調査を実施し、前庭部と内部の空間的関係を明らかにすることで、洞穴の利用実態の解明を目指したい。

また、本研究の主たる目的とは異なるものの、今回の調査により、前庭部において中世の土地造成や地鎮を含む儀礼的行為の痕跡が確認されたことは、洞穴の利用史を考察する上で極めて重要な知見である。現段階では、具体的な実施主体や人物を特定するには至らないものの、鎌倉時代末から南北朝期初頭にかけて、一定の手続きに基づいて前庭部の造成が行われていた事実が明らかとなった。今後の発掘調査においても、遺構・遺物の適切な記録と保存を継続し、洞穴の多様な利用実態の解明に努めていきたい。

### 引用・参考文献

赤星直忠1953「海蝕洞窟—三浦半島に於ける弥生式遺跡—」『神奈川県文化財調査報告』第20集 神奈川県教育委員会

赤星直忠1967「三浦半島の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』日本考古学研究会洞穴遺跡特別調査委員会、平凡社

神奈川県立歴史博物館（編）2022『特別展 洞窟遺跡を掘る—海蝕洞窟の考古学—』

鎌倉市教育委員会2001『大町糸迦堂遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

神澤勇一（編）1972『神奈川県立博物館発掘調査報告書6：間口洞窟遺跡 資料編』神奈川県立博物館

神澤勇一（編）1973『神奈川県立博物館発掘調査報告書7：間口洞窟遺跡 本文編』神奈川県立博物館

神澤勇一（編）1974『神奈川県立博物館発掘調査報告書8：間口洞窟遺跡（2）』神奈川県立博物館

神澤勇一（編）1975『神奈川県立博物館発掘調査報告書9：間口洞窟遺跡（3）』神奈川県立博物館

急傾斜地区埋蔵文化財調査団1994『間口遺跡』急傾斜地区埋蔵文化財調査団

釩持輝久1972「三浦半島における弥生時代の漁撈について」『物質文化』19 物質文化研究会

釩持輝久1996「三浦半島南部の海蝕洞窟遺跡とその周辺の遺跡について」『考古論叢神奈河』第5集 神奈川県考古学会

鈴木栄三ほか編1993『神奈川県の地名』日本歴史地名体系 第14巻 平凡社

中村 勉2017『海に生きた弥生人 三浦半島の海蝕洞窟遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」118 新泉社

長井謙二2020「日向洞窟遺跡 2020年発掘調査」『第34回 東北日本の旧石器文化を語る会』東北日本の旧石器文化を語る会

西川修一2018「三浦半島と相模湾岸の海洋民系文化について」『横須賀考古学会 研究紀要』第6号

杉山浩平ほか2019『再考「弥生時代」—農耕・海・集落—』雄山閣

### 註

(1) 一般的には「洞窟」という語が用いられるが、本来は通り抜けることができる岩穴を指す。そのため本論ではより包括的な意味をもつ「洞穴」を採用している。

### 謝辞

本研究を調査にあたり、風間智裕氏（茅ヶ崎市教育委員会）には調査に多大なる協力をいただいた。鈴木弘太氏（鎌倉市教育委員会）には合わせ口かわらけの年代や調査方法についてご助言を賜った。また、本稿を草するにあたり、下記の方々にご教示頂きました。記して感謝申し上げます。

（敬称略・五十音順）

飯島重一、岡本孝之、柏木善治、川口徳治朗、河原洋一、小玉秀成、佐藤孝雄、坐古善光、白石哲也、谷口肇、千葉毅、本郷一美

本研究は、横浜学術教育振興財団2024年度研究助成（研究代表者 佐藤兼理）の成果の一部である。